

「生徒と共に課題をつくる導入」と「活動前（予想）の段階と
活動後（分析と解釈）における言語活動」の授業について

(1) はじめに

生徒が主体的に授業に取り組むためには、生徒自身が見いだした問いから学習課題を設定することが重要である。教師が課題を与えるのではなく生徒と共に課題をつくることで、生徒は課題を自分事としてとらえ、授業への取り組み方が変わる。また、活動前の「予想」の段階で自分なりの見通しがもてると、結果が予想通りでも予想と異なった場合でも、予想と照らし合わせながら「分析と解釈」ができる。

既習事項とずれが生じる事象を提示して生徒が感じる違和感から問いを引き出す導入と、活動前後の言語活動を充実させる工夫について紹介する。

(2) 「生徒と共に課題をつくる導入」について

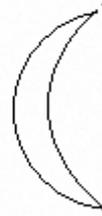
① 前時の学習内容の確認

- 月の満ち欠けは、太陽と月と地球の位置関係の変化によることを学習している。

② 課題の設定

- 金星が欠けている写真（図1）を見せ、生徒が月と勘違いするように仕向け、興味・関心を高める。
- 続けて金星を定期的に撮影した写真（図2）を見せ、月かどうかを改めて考えさせる。
- 写真が月であると考えた根拠、月ではないと考えた根拠についてそれぞれ生徒に発言させて聞き合うことで、金星の「満ち欠け」と「大きさの変化」の関係について考えさせる。その後、どのような課題を探究していくかを生徒に提案させる。
- ここまでの間に、生徒は金星の「満ち欠け」と「大きさの変化」に注目し、「金星はなぜ満ち欠けをしたり、大きさが変化したりするのか」という問題を見いだしているので、生徒の発言を引き出しながら学習課題を設定する。

図1



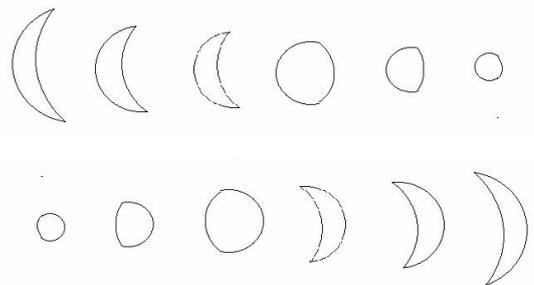
※ 著作権のため、イラストにしてある。

(3) 「活動前（予想）の段階における言語活動」の場面について

① 予想の項目

- 写真（図2）を改めて提示し、金星の「満ち欠け」と「大きさの変化」について、月の運動や見え方、金星は地球の内側の軌道を公転している等の既習内容と関連付けて予想できるようにする。
- 生徒は、金星の「満ち欠け」は、太陽と金星と地球の位置関係の変化、「大きさの変化」は、金星と地球の公転のスピードの違いによって生じる距離の変化によると予想した。
- 金星の見える時間について注目する生徒が出てくることを想定して、その準備もしておく。

図2



※ 著作権のため、イラストにしてある。

(4) 「活動後（分析と解釈）における言語活動」の場面について

① 実験

- D（ディスカッション）ボードと3種類の発泡スチロール球（図3）を使用して、班ごとに話し合う。
- 地球から金星を見る視点と宇宙から太陽、金星、地球を俯瞰する視点を明確にするために、視点を固定して考えるような手立てもあるが、今回はDボードやモデルを自由に使用し、思考させたいと考えた。各班では、Dボードに太陽と金星や地球の公転軌道を記入したり、準備した金星のモデルを動かして水平方向からのぞいたりしながら、見る視点を変えて考え、話し合う姿が見られた。生徒が失敗しないように教師が手立てを設けすぎると、自由な発想を妨げる場合があると考えた。（図4）（図5）
- 全体的に話し合い活動が行き詰まった時は、中間発表をとり入れる場合もある。

② 発表

- 教師は、生徒の話した内容の要点を板書するようにする。また、教師が発表を聞いている生徒の表情やつぶやきを観察し、質問の時間に指名をして話し合い活動を活発にさせる。（図6）

③ まとめ

- まとめは、生徒自身の言葉で黒板に書くようにし、教師が一方向的に示すことのないようにしている。言葉が足りず、課題との整合がとれていない場合は、生徒とともに整理するようにしている。

図3



図4



図5

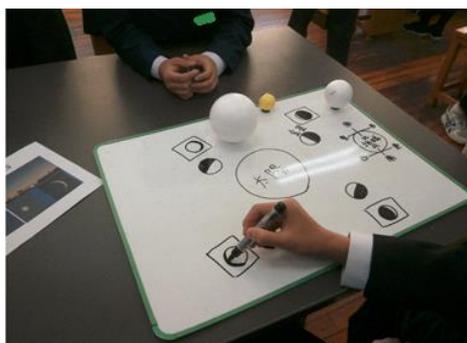
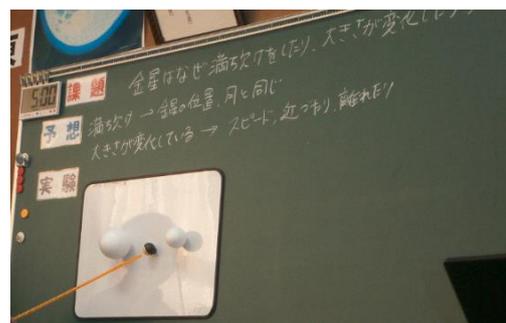


図6



(5) さいごに

生徒と共に課題をつくるには、学習訓練が重要である。4月に、「課題を設定するときは、必ず『～か』という疑問文にする」ことを生徒と確認しておく。疑問文の形にすることで課題を焦点化でき、何を調べて結果を導けばよいか、見通しが明確になる。

事象の提示の仕方や生徒の捉え方が影響して、設定する課題が学級によって異なったり、教師が意図していた課題にならなかつたりして、遠回りすることもある。しかし、生徒の「思い」が込められた「問い」は大切に取上げたい。予想外の「問い」を、教師自身も楽しむことが大切であると考えた。

（所属：須賀川市立第一中学校 大森康志）